

[第11回学術集会公開シンポジウム：家族看護研究のストラテジー]

家族看護介入研究—実践から理論を生み出す—

千葉大学医学部附属病院

吉田 千文

1. 実践の場で必要とされる家族看護介入研究

複数の人間が織り成す家族は個別的で複雑であり、多くの看護職者にとって家族看護実践は難しい実践である。実践の場で必要とされる家族看護研究は、看護職者が家族と向き合う際の指針となり看護ケアを導く援助理論の開発やマンパワー不足の我国の臨床でもベツトサイドで実践可能な援助方法の開発である。

家族看護実践モデルは国内外で Friedman ら¹⁾、Wright ら²⁾、鈴木ら³⁾などによって開発され、わが国ではこの数年で周産期、高齢者介護、終末期ケアなどの特定領域における家族援助理論の開発が進んでいる。今後さらに家族看護介入研究が行われる必要がある。

2. 家族介入研究とは

家族看護介入研究とは、家族に対して変化を意図した看護援助を行い、その効果から援助の有効性を明らかにする研究手法であり、次の3つのタイプがある。①構造化された家族看護介入を実施しその結果として生じた家族の変化から介入の有効性を実証する実験的デザイン、②個別家族へ援助指針に基づく看護援助を行いそのプロセスの分析から家族の変化の契機となった看護師の関わりを理論化する記述的デザイン、③家族の抱える問題解決のために研究者と家族が協力して解決策を導き出し、家族の相互作用にフィードバックする過程を循環させるアクションリサーチ。ここでは、筆者の研究を素材として記述的デザインを中心に検討する。

3. 看護学の観点からの家族の概念規定

家族看護介入研究においては、家族がデータ源であると共に介入対象でもあるため、家族の明確な概念規定が重要である。家族社会学者森岡⁴⁾の家族の定義がよく知られているが、看護学では、「家族」という現象を営む人々の体験世界から捉える視点を持ち、個々人の家族観や個々の家族で行われる相互作用のあり方が尊重される概念を規定することが重要である。

家族を相互に「家族」という意味を共有しあい相互作用しあう2人以上の人々のまとまりと規定した場合、研究対象としての家族を実体として捉えるためには、研究で扱う事象の中心となる人物を核にした人間関係をつかむことが必要になる。

老人がん患者家族を対象とした筆者の研究⁵⁾では、老人患者を中心に「老人患者、患者が家族員と認めるもの、及び自ら患者の家族員と認めるものが含まれる」とし、さらに「開放システム」として家族を全体的に捉える視点を明確にした。

4. 介入としての家族看護援助

家族看護介入研究では、家族看護援助の目的と方法についての明確な規定が必須である。実験的デザインでは厳密に、記述的デザインでは援助プロセスの中で変化する家族の状況に対応して適切な看護援助を判断し実施していくことができるよう、介入指針を出す必要がある。

5. 有効な家族看護援助の見出し方

看護援助は、家族との相互作用場面において個人及び家族の状況、あるいは看護師の行為に対する相手の反応に応じて、変化を意図して看護師が行う行為である。看護師が直接働きかけるのは個人であり、個人の変化によって看護師の関わりは刻々と変化していく。相互作用の繰り返しによって個人の変化は進行していくが、一方で個人の変化はその個人にとどまらず他の家族員との関係の変化を引き起こし他の家族員にも影響を与える。看護師は家族内の複数の家族員それぞれに関わるのでこの変化の波は幾重にも重なり複雑な様相を示す。家族の変化は、家族を構成する個人と個人間の関係の質的な変化が有機的に関連しあいながら進む複雑な過程といえる。したがって家族の変化と家族の変化に影響を及ぼした看護援助とその効果を単純に因果関係で捉えることは難しい。

家族の変化と看護援助の関係を明らかにするためには、相互作用場面での個々の家族員の状況、家族員間の関係の状況、家族員と看護師の相互作用の状況について詳細を見る視点と、患者の療養にそった一連の時間経過に沿って家族の様相と看護師の関わりを捉える全体的な視点の両方が必要である。そして、一つひとつの場面がどのように積み上げられて全体としての変化の過程をたどるのかを見ることが必要となる。

そのためには、研究者自身が直接、家族の生きた姿に関わり家族の全体像と詳細を把握するとともに、自らの体験そのものをデータとすることが求められる。こうした、個々に異なる変化の様相をしめす家族とそれに応じた看護師のかかわりを丹念に分析するためには、事例研究が最も適している。

また、家族システム全体の変化を真実性を確保しつつ捉えることは非常に難しい。筆者の研究では、個人の成長と家族内の個人間の関係の成長のそれぞれを明らかにし最終的に全体統合しひとまとまりの家

族の成長を捉える方法を試みた。

看護援助とは、ある共通の意図を有する看護師の行為の集合と考える。したがって家族看護介入研究において家族の変化に影響を及ぼした看護援助を明らかにするためには、家族の変化に関連する看護師の行為の一つ一つを取り出し、それらの行為に看護師が付した意図に基づき共通するものを集めていくことで可能となる。また看護援助の効果とは、最終的な家族の状態によって示される結果ではなく、家族の変化の過程に及ぼす肯定的な影響をいう。したがって、看護援助の効果を明らかにするためには、個々の家族の療養経過全体から変化を示す現象を見出し、それに関連する一連の援助場面を取り出して、場面ごとの看護師と患者及び家族員の相互作用と場面間の関連について詳細に分析することが適切である。

6. 家族看護介入研究の一例

筆者の家族看護介入研究「手術を受ける老人がん患者の家族の成長を促す看護援助」の目的は、老人がん患者の癌診断から手術を経て在宅療養へ続く療養期間を通して患者を含む家族の成長を促す看護援助を明らかにすることであった。研究方法は、研究者自ら家族看護援助を行い、同時に収集した家族の状況と看護師の関わりに関するデータから、家族の成長を促す看護援助を明らかにする質的帰納的研究方法をとった。研究は①研究者の看護実践を方向付ける理論的基盤を明確にする、②個別家族に対して①の理論的基盤をもとに家族の成長を意図した看護援助を展開し、同時に参加観察法、面接法等でデータ収集、個別家族ごとの事例分析とそれを統合した全体分析から結果を導き出す、の2段階から成る。対象6家族から以下の結果を得た。老人がん患者の成長は高齢の自分に自信と誇りをもち必要な援助を家族員から得て療養を行う、自分を保って余命を生きる姿勢を見出すなどの8項目、家族員の成長は患者の異なる価値観や生き方を認め支援する関係の持ち方

を見出すなどの5項目, 個人間の関係の成長は相互に思いや考えを理解し合う関係を発展させるなどの4項目. そしてこれら家族の成長を促す看護援助として, 暖かく誠実な態度, 深層への関心の導き, 意欲と希望の支持, 開かれたコミュニケーションへの援助, 家族で取り組む患者主体の療養への援助を含む9つが明らかとなり, これらの看護援助の効果は, 家族関係の要となる個人の成長を促すことで家族関係が肯定的に変化する突破口が開く, など4つが確認された.

7. 今後の家族看護介入研究に向けての課題

家族看護介入研究は, 家族看護学が実践の科学として発展していくための重要な領域である. しかし家族および家族看護介入の複雑さに基因する課題が山積している. 以下に重要なものを列記した.

- ①「家族」に含まれる個人の特定方法, ②「家族」からの研究参加承諾方法, ③看護介入の有効性確認方法と真実性確保方法, ④複雑なデータ分析過程の効率化・体系化, ⑤研究者の家族看護実践能力向上, ⑥家族看護介入を行う研究フィールドの確保.

文 献

- 1) Friedman, M.M., Bowden, V.R. & Jones, E.G. : Family nursing : research, theory & practice 5th ed, Prentice Hall, 2003
- 2) Wright, L.M. & Leahey, R.M. : Nurses and families : a guide to family assessment and intervention 3rd ed, F.A. Davis., 2000
- 3) 鈴木和子, 渡辺裕子 : 家族看護学—理論と実践 第2版, 日本看護協会出版会, 1999
- 4) 森岡清美, 望月 嵩 : 新しい家族社会学, 培風館, 1997
- 5) 吉田千文 : 手術を受ける老人がん患者の家族の成長を促す看護援助, 千葉大学大学院看護学研究科博士論文, 1999